

福井県教育旅行ガイドブック「学び旅」 SDGs学習別冊集

古代ロマン

山の体験

※あくまでSDGs学習の素材としてのご提案ですので、SDGs学習としてのプログラムが特別に用意されているわけではありません。

福井県立恐竜博物館

P8~9



恐竜が減った理由などかつての地球の気候変動を知り、今後の地球環境について考えます。

大野市化石発掘体験センター

HOROSSA !

P11



化石という地域の貴重な自然遺産を保護しながら、観光や教育に活用していく方法を考えます。

福井県自然保護センター

P13



自然観察を通して、温暖化が生態系に与える影響を学習します。また、美しい星空の観察を通じて、光害など自分たちの生活が自然に与える影響や過剰な照明がエネルギー資源の無駄遣いになっていることなどを考えるきっかけとします。



自然観察を通して、森林、湿地、山地など陸上の生態系を学び、それらがもたらす自然の恵みを持続可能な形で利用できるように考えます。



ツリーピクニックアドベンチャーいけだ

P12



池田町はかつて林業の町として栄えていたが、主要産業であった林業は海外からの安価な木材の輸入により廃れていき、生活の利便性を求めて町外への転出が増加し過疎化が進みました。現在は、人口約2,400人、高齢化率は約4割を超えます。そのような中、地域の森林資源を活用し新たなビジネスを行うことで、地域経済の活性化、魅力向上を図ってきました。その結果、徐々に効果が生まれ、交流人口は増加し、移住者も増えてきています。小さな町の地域活性化の取り組みを学びます。



木は再生可能で持続的に利用出来る循環型資源です。化石燃料から薪へ自然エネルギーへの転換や、もう一度木の素材を暮らしに取り入れる工夫など、森林と共に生きる方法を学びます。



森の環境が良好に保たれていると、木の葉が腐葉土を作り、土壌からミネラルなどの栄養が溶け出し川に注ぎます。川は海へ流れ込み魚介類の餌となる豊富なプランクトンを成長させます。森が荒れ、木々の生育が悪くなると、土壌も減少し、川に注ぐ栄養も少なくなり海の生物が育たなくなります。森と海は自然の生態系で繋がっており、「森は海の恋人」と言われています。山と海の関わりを考えます。



山林の多くを占める人工林の杉を伐ることで、新たに広葉樹が芽生え、森の植生が豊かになり、生き物にとっても住みやすい多様性のある森林環境へ変化させていきます。多様性があり、豊かな土壌を持つことで、土砂災害の危険を低下させ、海の生き物も育み、生態系を維持しながら地球温暖化防止にもつなげていきます。山の役割を考えます。



海の体験

漁業体験

(若狭美浜はあとふる体験、若狭三方五湖わんぱく隊、ブルーパーク阿納、若狭おおい・高浜教育旅行誘致推進ネットワーク、遊敦塾)

P14~19、P22~24

2

銅鑊を
ゼロに



12

つくる責任
つかう責任



漁業体験や魚さばき体験などを通して、実際に自然の恵みをいただくことの大切さや感謝などを学びます。
また、資源を利用することと、海の環境を守ることとの調和を考えます。

14

海の豊かさを
守ろう



海の環境や海洋生物の種類・生態など幅広い学習の展開が可能で、海への理解を深め、自然の尊さを学ぶことができます。



国立若狭湾青少年自然の家

P20~21

14

海の豊かさを
守ろう



カッター、シーカヤック、スノーケリングなどの海での活動を通して、海の生物や資源の豊かさを感じながら、海洋汚染や生態系への悪影響の実態を知り、その防止や保全のために自分ができることを考えます。また森と海が隣り合わせにあるフィールドを活かし、森と海とのつながりから、持続可能な海の利用の仕方についても考えます。

15

陸の豊かさも
守ろう



ハイキングやオリエンテーション、ウォークラリーなどの山での活動を通して、動物や植物を発見したり、その様子を観察したりして、森の豊かさを感じながら、森林減少の阻止や山地生態系を保全・回復していくための視点を学びます。

12

つくる責任
つかう責任



野外炊事では、自然と調和したライフスタイルに関する知識と技能を身に付けるとともに食品ロスを減らしていくために自分ができる具体的な行動を考えます。
クラフト活動では、天然資源を積極的に利用し、廃棄物の発生を減らすとともに、それらを持続可能及び効率的に利用することについて考えます。

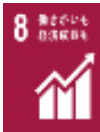


越前町遊漁船業組合

P25



越前町は、古くから漁師町として福井県の食卓を支えながら発展してきました。また、全国的に知られる「越前がに」の水揚げ港として知られ、漁業とその一次産業を支える観光業により経済が成り立ってきました。海とともに生きてきた町だからこそ海を守り大切にしてきた漁業者の知恵や技を学びます。



「越前がに」は、2018年に農林水産省が進めるGI（地理的表示保護制度）に、カニでは全国唯一の登録を受けるなど、「越前がに」を知的財産として登録・保護をする活動を行っています。その他、越前町や福井県では、越前海岸で水揚げされる魚介類のブランド化やオリジナル食材の開発を行い、全国的な知名度向上のための取組みを行っています。



近年、越前町の漁業は、「越前がに」の資源増大のために新技術を活用した操業日誌のデジタル化等を行っています。



海と気候は、切っても切り離せないほどの密接な関係にあります。近年の地球温暖化による気温の上昇が極地の氷を溶かし、海面の上昇を招き大雨や大雪などの自然災害が各地で発生しています。プラスチックゴミなど海ゴミの削減への取組が急務となっている現状把握と地球温暖化対策について考えます。



実際にサカナを獲っている漁師・漁業者との触れ合いや魚釣り体験により自分で魚を釣り上げることで、生き物の命をいただくという「食育」を学び、フードロスの削減につなげます。



越前おととLabo

P26



越前町の旬の魚を使った『魚食文化体験（魚さばき体験）』により、年々深刻化する魚離れを解消し、日本古来の魚食の大切さを学びます。魚を丸ごと一匹使って調理することで、生き物の命をいただく「食育」やフードロス削減の必要性を学びます。



越前町は、古くから漁師町として福井県の食卓を支えながら発展してきました。また、全国的に知られる「越前がに」の水揚げ港として知られ、漁業とその一次産業を支える観光業により経済が成り立ってきました。海とともに生きてきた町だからこそ海を守り大切にしてきた先人達の知恵や技を学びます。



食べる魚が獲られた場所や獲った漁業者を知ることで、フードロスの削減や食べる物の産地を知ることの大切さを学びます。日頃より、食品の産地や認証マークを受けた食品を食べることが世界的な飢餓をなくすことに繋がることを知ります。

越前岬水仙ランド

P26



地域住民だけではなく、観光客がどうしていくべきかを自分事として考えていきます。持続可能な観光地として国の重要文化的景観である越前海岸の水仙畑を守っていくために、作り手側（農家）、つかう側（観光客や水仙購入者）の責任を考え学びます。



越前海岸の水仙は、『越前水仙』のブランド名で知られ、日本水仙三大群生地の一つです。栽培面積は、日本一を誇ると言われており、2020年度には、国の重要文化的景観に花の登録として全国初の認定を受けました。しかし、農家の高齢化やシカやイノシシなどの害獣被害により年々減少傾向に陥っています。『越前水仙』の復興と持続可能な観光地への取組みを学びます。

農業体験

ロハス越前

2 飢餓をゼロに



大豆の収穫や加工体験を自ら行い食すことで、大地の恵みをいただく実感を得て、食材を大切に作る心を育みます。また、農業の大変さ、達成感を味わうことで、一次産業である農業に対する理解を深めます。

15 陸の豊かさも守ろう



面積の3/4を森林に囲まれた旧今立町のエリアにおいて、森林の手入れに手が行き届くよう薪の活用を進めています。間伐や雪折れ、枝打ちなどの森林保全の作業をして、切り出した木が薪として有効利用され、作業にきちんと対価を支払える仕組みを作っています。そのために体験プログラムに、薪でご飯を炊く、石窯の薪窯でピザを焼く、グッチオープン料理を作るなどの取り組みを行い、森林再生の循環を生み出しています。

7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに



森林を守ることと同時に、切り出した木を薪として、エネルギー源に利用します。薪を使った調理体験や薪割体験などを通して、エネルギーを作り出す大変さや大切にする心を学びます。



かみなか農楽舎

2 飢餓をゼロに



農業という食を生み出す産業から、中山間地域の農地を活用し山・田・畑・川など自然環境をなるべく守りながら行う現場の取り組みを学び、食糧生産と自然環境との関係を知り、食品ロスについて考えます。

8 働きがいも経済成長も



11 住み続けられるまちづくりを



かみなか農楽舎は都市からの若者の就農・定住を促進し集落を活性化することを目標に農業後継者の育成を農業の現場から行っています。農業を通じて人材を育成する農村社会の活性化について学びます。

14 海の豊かさも守ろう



田んぼと海は水を通じてつながっています。自分たちのフィールドだけでなく、流れていく水に対しても環境に配慮した取り組みを農産物の栽培を通じて行っています。薬を使う農法をなるべく抑え、草刈りや草取りなど人の労力を使う環境保全型の農業の取り組みから海の豊かさを守ることを学びます。

15 陸の豊かさも守ろう



農業では近年動物による産物被害が起こっています。田んぼや畑の周りに柵を作り被害を防止するだけでは何も現状は変わらない為、集落の住民も巻き込み集落まわり山一周をトレイルコースとして整備しました。山を管理しつつ里山との境界もつくり、管理しながら山と田畑を守る取り組みから陸の豊かさを守ることを学ぶ。



一乗谷朝倉氏遺跡

P29



かつての日本の身分制度、男女格差、安心して暮らすことのできなかつた戦国時代の繁栄と衰退を学び、現代での不平等の是正・平和の大切さなどを考えることができます。

歴史文化学習

坐禅体験

御食国若狭おばま食文化館

P32

調理体験では、できる限り地元の新鮮な食材を使い、参加者に対して地元食材の普及に努めています。産地が近くにあることで食材を身近に感じ、食材を大切にすることを育みます。



12 つくる責任
つかう責任



伝統工芸品は地方の特色を生かしたもので、自然由来の素材を生かして出来上がったものです。若狭塗箸の研ぎ出し体験では、時間をかけて箸を研ぐことにより、ものを大切に扱う心も育みます。また、若狭塗箸は水や熱に強いので、長く使えます。



14 海の豊かさを守ろう



15 陸の豊かさを守ろう



日本食の特徴である「素材を生かす調理」は、古くから豊かな自然に感謝してきた日本人の精神性から生まれたものと考えられています。豊かな風土で形成された若狭おばまを通じて日本の伝統的な食文化を解説し、海、山、里の大切さを学びます。

若狭三方縄文博物館

P30



縄文時代の人類の生活と現代の生活とを比較し、便利になったことによるメリットと環境に対する負荷を調べ、現代そして将来の生活・環境について考えます。

福井県年縞博物館

P31



7万年分の地球の歴史、気候変動を知り、今後の地球環境について考えます。



水月湖から7万年分の年縞を取り出し「世界標準のものさし」となった年縞の研究について知り、将来の職業を考えるきっかけとします。

大野まちなか散策

P34



天然記念物であるイトヨ生息地の観察や大野市が取り組んできた湧水文化を学習し、きれいな水をずっと使っていくために必要なことを考える。

曹洞宗大本山永平寺・大安禅寺

P35~36



食べ物や水などを仏の姿そのものとして尊び、無駄にせず大切に丁寧に頂くという修行生活の実践、また困難を抱えている人々の苦しみを少しでも和らげることが出来るよう、願い行動するという菩薩行の実践が、「誰一人取り残さない社会の実現」というSDGsの理念に共通しています。坐禅体験で自分を見つめ直し、どういった自分になりたいのか、将来について考えます。



ものづくり体験

伝統工芸・ものづくり体験

P39~43

8

働きがいも
経済成長も



ものづくりの産地が集積しており、県外から移住した職人さんも多くいます。受け継がれてきた技と想いを知るとともに、伝統を守りつつ時代のニーズに対応した取組みを学び、仕事とはどのようなものか考えます。

9

産業と技術革新の
基盤をつくらう



伝統的な方法と、現代の技術の融合について考えます。



平和学習

人道の港 敦賀ムゼウム

P45

16

平和と公正を
すべての人に



国際港として開かれていた敦賀港は、ポーランド孤児やユダヤ難民が上陸した日本で唯一の港です。2つの出来事の歴史をはじめ、上陸当時、敦賀市民が彼らを温かく迎え入れたエピソードなど、資料や映像で平和や命の尊さについても学ぶことができます。

17

パートナーシップで
目標を達成しよう



地域活性化

さばえSDGs推進センター

P48

5

ジェンダー平等を
実現しよう



鯖江市は、女性の就業率や共働き率が非常に高く、幅広い世代の女性が活躍しています。また、市民が積極的に姿勢に参加する「市民主役のまちづくり」の中で、「鯖江市役所JK課」や「学生団体With」等、まちづくりにも若者や女性が参加しています。こうした地域特性を活かし、鯖江市では「ジェンダー平等の実現」を軸とした様々な取組を行っています。

9

産業と技術革新の
基盤をつくらう



古くから「眼鏡、繊維、漆器」の3大地場産業を中心としたものづくり産業で栄えてきた鯖江市では、高い技術をもつ職人が今でも多く活動しています。今では、その技術力を活かして医療機器など別の分野に進出したり、環境に優しい商品を開発したりするなど、新たな取組を行う企業も増えています。

11

住み続けられる
まちづくりを



鯖江市では、「誰一人取り残さない」地域社会の実現を目指し、SDGsの理念を取り入れたまちづくりに取り組んでいます。50年後も、100年後も住みたい、住み続けたいと思えるようなまちを目指した様々な事業を行っています。

12

つくる責任
つかう責任



ものづくりのまちとして発展してきた鯖江市だからこそ、持続可能なまちをつくるために将来に対して責任のあるものづくりを推進していくことが重要です。伝統の技を活用して、環境や人、社会に配慮したものづくりを行っている企業の取組を学び、エシカルなものづくりや消費行動について考えます。

17

パートナーシップで
目標を達成しよう



SDGsの達成のためには、産官学民が連携し、一人一人が「自分ごと」として行動する事が重要です。さばえSDGs推進センターでは、「ひと、もの、情報がつながる空間」をコンセプトに、様々なステークホルダー（市民・企業・学校・団体等）の連携を推進し、情報の共有を行いながらSDGsの達成を目指した様々な事業を展開しています。

